

蜀中九日（王勃）
しよくちゆうきゆうじつ おうぼつ

九月九日望郷台
くがつ ここのか ぼうきよう だい

他席他郷客を送るの杯
たせき たきよう かく を おく の はい

人情已厭南中の苦
にんじよう すで いと なんちゆう く

鴻雁那ぞ北地より来る
こうがん なん ほくち より きた

九月九日望郷臺 他席他郷送客杯
人情已厭南中苦 鴻雁那從北地來

解説 この詩は作者が鬪鷄の激文を書いて免職になったのちに、蜀を旅したときの作。

語釈 ※九月九日＝重陽の節句。高台に登って酒を飲み、災厄を除く習俗がある。※望郷台：玄武山にある高台の名。※他席他郷＝よその土地での宴席。※送客杯＝旅人を送る別離の杯。※人情＝人の感情。※已厭＝もうあきあきしてしまった。※南中＝広く南方の地をさす。※鴻雁＝鳥のガンのこと。※那＝どうして。※北地＝北の地方。都の長安をさす。

通釈 九月九日の重陽の節句に、故郷をしのんで望郷台に登り、他郷において他所の宴席で、友の旅立つのを送る杯を酌み交わす。私の心はもう蜀の地の暮らしにつくづくいや気がさしているのに、なぜあのガンは、わざわざ北の地を捨ててこちらへと飛んでくるのだろうか。